

- 要旨集 -

筑波実験動物研究会 第59回講演会 プログラム

人獣共通感染症 / ウィルス感染症 を再考する

日時：2021年11月26日(金) 13:30-17:05

場所：Zoom webinar

TALAS Web サイト受付フォームよりお申込み下さい。 <https://www.talas.jp/>



13:00 - 13:30 会場開場

13:30 - 13:32 事務連絡

13:32 - 13:40 開会の辞・選出済み新規名誉会員ご報告 小山 公成 会長

13:40 - 14:25 基調講演

『実験動物とコロナウイルスーMHV感染から見えてきたものー』

東京大学大学院 農学生命科学研究科 獣医学専攻

久和 茂 先生

座長 杉山 文博 先生

14:25 - 14:30 法人会員のご紹介①

14:30 - 15:15 『新型コロナウイルスの動物への感染を阻止しなければ終息できない』

東京農工大学農学部附属 感染症未来疫学研究センター

水谷 哲也 先生

座長 松浦 裕一 先生

15:15 - 15:25 休憩

15:25 - 16:10 『実験動物とBウイルス』

一般社団法人予防衛生協会

藤本 浩二 先生

座長 本多 新 先生

16:10 - 16:15 法人会員のご紹介②

16:15 - 17:00 『動物実験環境下における実験者へのBウイルス感染防御について』

株式会社新日本科学 専務取締役

角崎 英志 先生

座長 荒川 博 先生

17:00 - 17:05 閉会の辞 國田 智 副会長





講演会参加者へのお願い

本講演会に関わるライブ配信動画の録画・録音・撮影・印刷やスクリーンショット等でキャプチャーする行為、また無断転用・複製は一切禁止いたします。

筑波実験動物研究会 事務局

筑波実験動物研究会 法人会員

アステラス製薬株式会社	株式会社アニマルケア
EPトレーディング株式会社	エーザイ株式会社
九動株式会社	株式会社ケー・エー・シー
株式会社小宮	三協ラボサービス株式会社
株式会社スターラボ	大鵬薬品工業株式会社
株式会社ツムラ	テクニプラスト・ジャパン株式会社
一般財団法人動物繁殖研究所	株式会社夏目製作所
日本チャールス・リバー株式会社	ハムリー株式会社
株式会社ボゾリサーチセンター	(五十音順/全 17 社)



[基調講演]

座長: 杉山 文博 先生 (筑波大学)

実験動物とコロナウイルスーMHV 感染から見えてきたものー

東京大学大学院 農学生命科学研究科 実験動物学研究室

久和 茂 先生

昨今の COVID-19 のパンデミックにより、コロナウイルスが注目されている。実験動物領域では、マウスを宿主とするコロナウイルスであるマウス肝炎ウイルス(MHV)は存在そのものが悪であり、実験動物施設から駆除すべき対象でしかない。にも拘わらず、小職は奇特(?)にも MHV を用いて哺乳動物であるマウスが、どのようにウイルスに打ち勝とうとしているのか研究してきた。

本日は、少し昔の研究になるが、MHV 感染におけるT細胞の感染防御効果およびウイルスの変異について、実験動物学における感染症論とともにご紹介する。変異株の出現は、COVID-19 にも通じるところがあるように思える。

また、感染症において、伝播も重要なポイントである。ちょっと以前に、MHV の基本再生産数に関する検討も行っていたので、併せて紹介する。



座長：松浦 裕一 先生（農研機構）

新型コロナウイルスの動物への感染を阻止しなければ終息できない？

東京農工大学農学部附属 感染症未来疫学研究センター

水谷 哲也 先生

2019年12月ころ、中国の武漢でコウモリからヒトに感染した新型コロナウイルスが全世界に蔓延しています。このように新型コロナウイルス感染症は人獣共通感染症としてスタートしました。緊急事態宣言やロックダウンにより家庭内での生活時間が増えると、ヒトから犬や猫への感染が危惧されました。当初、犬猫への感染率は低いと考えられていましたが、特に猫では最大40%が感染していることが報告されています。新型コロナウイルスに感染した猫が自由に外出すると、ハクビシンなどの野生動物に感染させてしまう可能性があります。野生動物で蔓延すると、数年後にヒトで終息したとしても、野生動物からの感染の恐怖に絶えず怯えなければならなくなってしまいます。すでに海外では野生のミンクやオジロジカなどに新型コロナウイルスが感染しています。新型コロナウイルス感染症を地球レベルで終息させるために必要なことを考察いたします。



座長:本多 新 先生(自治医科大学)

実験動物とBウイルス

一般社団法人予防衛生協会

藤本 浩二 先生

Bウイルスはカニクイザル、アカゲザル、ニホンザルなどのアジア産マカカ属サルに自然感染している、HSV(単純ヘルペスウイルス)と近縁なシンプレックスウイルスであり、人獣共通感染症に係る唯一のサル由来シンプレックスウイルスである。Bウイルス感染に対して、マカカ属サルは無症状かまれに口腔内潰瘍や結膜炎を起こすが、感染サルは終生Bウイルスを三叉神経節や腰仙神経節に保持し、間欠的にウイルスを口腔粘膜液や性器粘膜液中に排出する。

ヒトがサルからの咬傷などでBウイルスに感染した場合、重篤な脳脊髄炎を起こすため、マカカ属サルを実験に使用するに当たっては、Bウイルス感染を防ぐための対策が必要となる。

Bウイルス感染に対するバイオセーフティ対策では、サル類のモニタリング検査、个人防护具や安全機器の使用、施設整備等を組み合わせて対応する。

今回の講演会が、Bウイルス感染対策について再考の機会となり、注意喚起につながると良いと思う。



座長：荒川 博 先生(エーザイ)

動物実験環境下における実験者への B ウイルス感染防御について

株式会社新日本科学

角崎 英志 先生

ヒト用医薬品の主流は近年、抗体医薬品などであるが、げっ歯類などの実験動物種には交差反応性を示さない候補品が多数存在する。薬理効果が認められない動物種で、その安全性を検証することは科学的合理性に欠くため、非ヒト霊長類の実験動物としての意義は重要性を増している。実験者の労働安全衛生を保全する立場からは、物理的な咬傷やひっかき等に注意することはもちろん、人獣共通感染症を十分に理解した上で、それら微生物による曝露を受けないように実験操作を行う環境を整備する必要がある。なかでも、非ヒト霊長類で留意すべきは B ウイルス感染症である。2019 年 11 月に本邦で初めての B ウイルスのヒトへの感染例が判明し、行政による現地調査が行われたが、明らかな感染経路は特定されなかった。本発表では、当社における実験者への感染防御に対する取り組みを紹介する。